

世界トップクラス女子バレーボールチームの戦術に関する研究

A study on the tactics of world top-class women's volleyball team

田原 武彦*

Takehiko Tahara

I. はじめに

1996年の第26回アトランタ・オリンピック大会が終了後、バレーボール競技においては、現在、各国男女ナショナルチームともメンバー構成において変換期である。それは、オリンピックに出場したメンバーを中心に1998年の世界選手権、2000年のシドニー・オリンピックを目指すチームと新たにメンバー構成を行い、チーム作りを実施するのに分かれる時期である。日本のナショナルチームは、男子は、ほぼ半数の選手が入れ替わり望むのに対し、女子では、大半の選手が入れ替わり、しかも年齢の若いメンバーで新たに目指す構成となった。

また、世界トップクラスのバレーボールチームの傾向は、体格の大型化が進み、例えば、平均身長では男子200cm、女子185cmの選手構成の時代を迎えている。また、チームとしての戦術面では、攻撃法・守備法などにおいて、複雑化が顕著に進んでおり、この傾向は、従来、男子に多く見られたが、近年、女子においても複雑なコンビネーション攻撃を用いるチームが多くなった。したがって、今後、複雑化している戦術面などを調査することも非常に重要であると考えられる。

バレーボールに関する調査や研究については、特に、選手の技術評価についての面では、日本や世界のトップレベルの選手のスパイク、ブロック技術に関し、かなり詳細に報告されている¹⁾。また、試合の分析に関したものは、男子チームについてはいくつか報告があり、ここでは世界トップレベルチームの戦術面に関する調査や研究などがされている。しかしながら、女子については、島津の研究で総得点率、総得点権率および総失点率、総失点権率から戦術を検討し報告されているがあまり実施されていない状況である。

そこで、本研究においては、世界トップクラス女子バレーボールチームの特徴をとらえるため、その方法として、特に、サーブプレッシュからの攻撃のパターンを全ローテーション別（6ローテーション）に分析を試みた。

II. 研究方法

1) 研究対象

平成10年8月4日原稿受理 *教養部

研究対象チームは、現在、世界のトップクラスのチームであるキューバ、ロシア、中国、ブラジルである。調査時期は、1997年8月に開催されたワールド・グランプリ大会（韓国、ホンコン、岐阜、神戸）での試合。及び、1997年11月に開催されたグラウンド・チャンピオン大会（大阪、広島、東京）の試合である。

2) 調査の方法

バレーボールコートエンドライン後方の観覧席から全コートカバーできるようにCCD-TR V92ビデオカメラを設置し、試合開始から終了までの全プレイを撮影した（図1）。

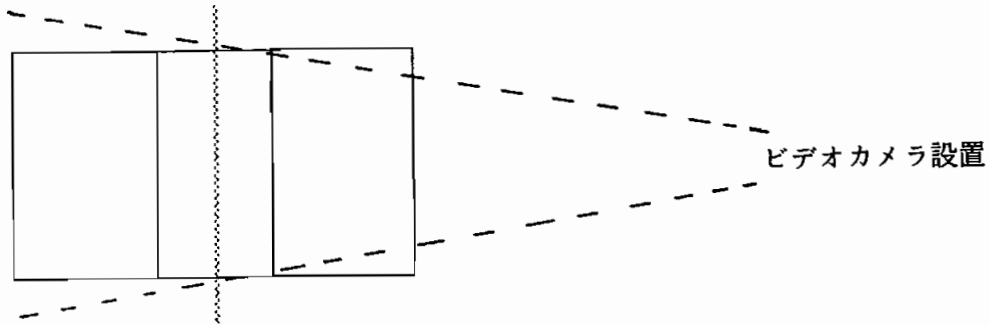


図1 ビデオカメラ設置位置

3) 分析の方法

分析の方法は、試合を撮影したビデオテープを各チーム毎にサーブレシーブからの攻撃を全ローテーション別に編集を試みた。そして、その映像から、誰が、どの位置から、どのようなスパイクを、どの位置へ、どれだけ打ったかを分析し、各チーム毎にコンビネーション攻撃のパターンをローテーション別に図式化（日本バレーボール協会調査部西村方式を参考）を試みた。なお、スパイクの種類は、図2に示した。

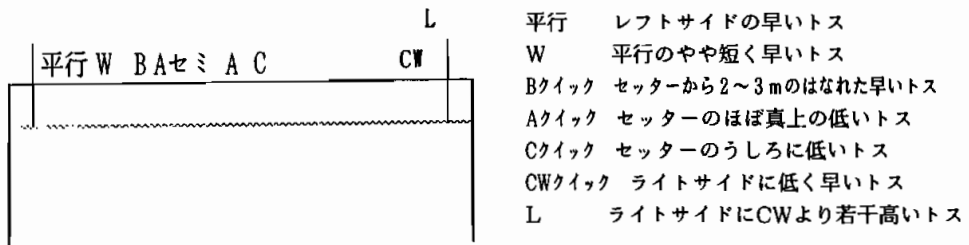


図2 攻撃の種類（コートエンドラインからバレーネットを基準として）

Ⅲ. 結果の概要

結果の概要は、各チーム毎に試合のスタートメンバー（表参照）及びサーブレシーブからの攻撃のパターンを示した（図参照）。

1) キューバチーム

○全体的な特徴

チームの特徴は、全員が豊かなジャンプ力で破壊力のあるスパイクを打つ、典型的な攻撃型のチームである。中でもレフトのNo3とサウスポーのNo8は、世界でもトップクラスのスパイカーであり、また、センターのNo14、ライトのNo10も非常に力強い。

表1 キューバ

	身長(cm)	最高到達点(cm)	ポジション
No.3	176	334	レフト
No.8	180	326	レフト
No.10	191	342	ライト
No.12	176	318	セッター
No.14	185	326	センター
No.18	182	339	センター

レシーブボールがセッターに正確に返されなくても、トスさえ上がれば一発で決定するだけのスパイク力がある。ブロックは、センターラインを中心に高さがあり強い。

攻撃は、レフトのNo3,8は、レフト側から平行トスを打ち、センターのNo14,ライトのNo10が速効(A,B,C,CW)を打つ。サーブは、全員がコート後方からフローターサーブを打ち、相手側から言えば、非常にレシーブがしづらいサーブである。

○サーブレシーブからの攻撃

- ローテ1 センターNo18の速効A,B,C、ライトのNo10のCW、レフトのNo3の平行トス。打数は3、18が多い。
- ローテ2 ライトのNo10のCW、レフトのNo8の平行トス
- ローテ3 センターのNo14A,B,C、レフトのNo8の平行トス
- ローテ4 センターのNo14B,CW、レフトのNo8の平行トス
- ローテ5 センターのNo14L、No18のバックアタック
- ローテ6 レフトのNo3が非常に多い。

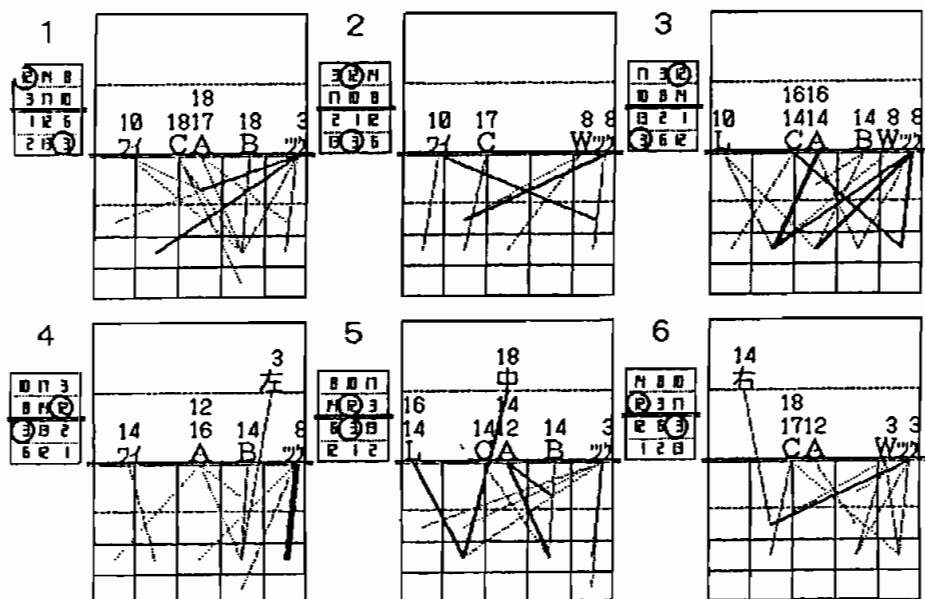


図3 キューバの攻撃のパターン

2) ロシアチーム

表2 ロシア

○全体的な特徴

特徴は、現在世界で平均身長が最も高く、その高さを生かしたチームである。その中でも、レフトのNo8とNo6は、身長が190cmを越え攻撃の中心であり、バックアタックも非常に力強い。また、センターのNo9は、速効のCWを打つことに関しては、世界のナンバー1である。

	身長(cm)	最高到達点(cm)	ポジション
No. 2	188	305	センター
No. 4	184	297	ライト
No. 6	192	307	レフト
No. 8	190	307	レフト
No. 9	176	309	センター
No.12	180	304	セッター

また、このチームの特徴として、攻撃と守備の選手を比較的、分業していることである。攻撃は、あまりコンビネーションなどは、使わはなく比較的単純であるが、常にバックアタックをからませる。

ブロックは、長身選手が多いこともあり、センターNo9,2を中心に非常に高い。レシーブは、No2, No4の2人制で安定はしているが、コートサイドなどに若干弱い面がある。

○サーブレシーブからの攻撃

- ローテ1 センターのNo9CW、No6のオーブントス。
- ローテ2 センターNo9CW、ライトのNo4A, Noのオーブントス。
- ローテ3 No8のバックアタック、No4のA、No6のライト。
- ローテ4 No8のレフトオープン、No4のライト。
- ローテ5 No8のレフトオープン、No6のバックアタック。
- ローテ6 No9のCW、No8のレフトオープン。

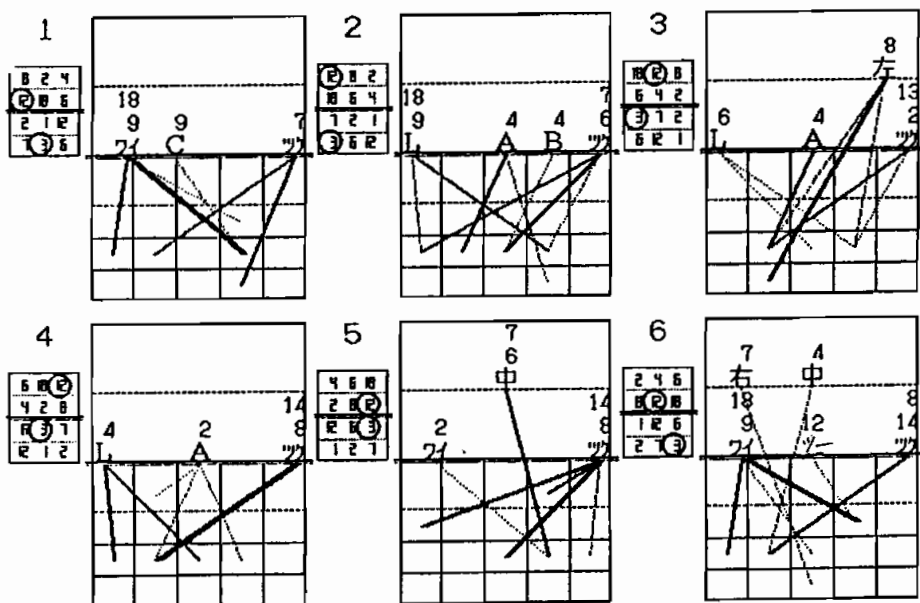


図4 ロシアの攻撃のパターン

3) ブラジルチーム

現在、世界のナンバー1と言われるセッターNo14のトスワークで、大型アタッカーが迫力あるコンビネーション・バレーを展開するチームである。

攻撃は、レフトのNo2,9、センターのNo6、13、ライトのNo10、いずれの選手も豪快な

スパイクを打ち、特に、バックアタックをからめたコンビバレーは、世界の最高である。

守備についても、大型選手にしては、比較的安定しており、粘り強さもある。また、サーブについては、No2のジャンプサーブは、非常に力強い。

セッターNo14の素晴らしいトス技術を中心として、現在、最も男子チームに近いバレーボールを行うチームである。

表3 ブラジル

	身長(cm)	最高到達点(cm)	ポジション
No. 2	185	310	レフト
No. 6	187	310	センター
No. 9	182	312	レフト
No.10	185	306	ライト
No.13	178	300	センター
No.14	180	292	セッター

○サーブレシーブからの攻撃

ローテ1 No13のA, No9のレフト平行、No10のB,L, No2のバックアタック。

ローテ2 No6のA, No9のレフト平行、No10のL。

ローテ3 NO6のA, NO10のバックアタック。

ローテ4 NO6のA, No9, 10のバックアタック。

ローテ5 No13のA,B,L, No2のレフト平行、No9,10のバックアタック。

ローテ6 No13のA, No10のレフト平行、No9のバックアタック。

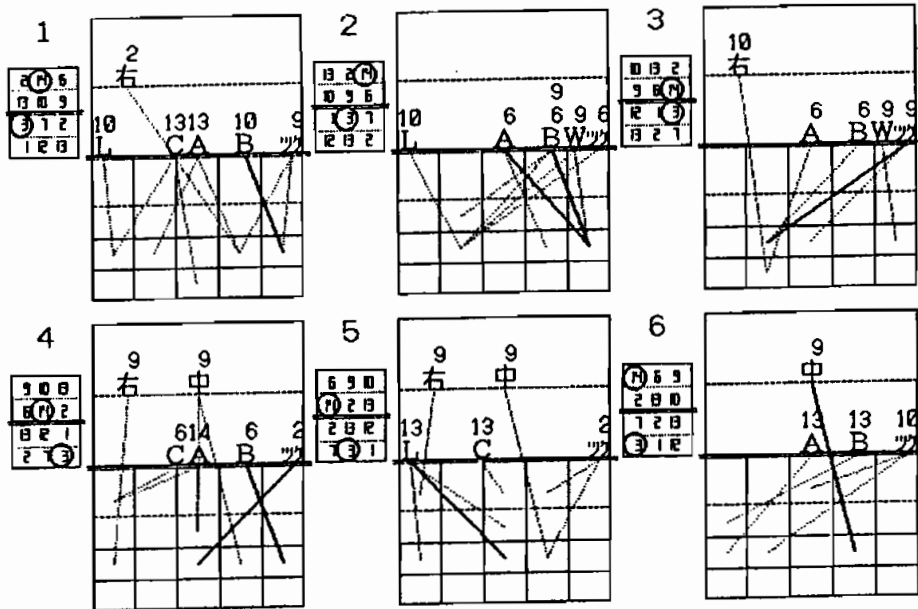


図5 ブラジルの攻撃のパターン

4) 中国チーム

○全体的な特徴

セッターNo7の高度なトスワークにより、バランスのとれたコンビ・バレーを展開する。攻撃は、多彩でありレフトのNo2と11を中心として、センターのNo1,5、ライトのNo12をからめたコンビネーションは非常に正確で速

表4 中国

	身長(cm)	最高到達点(cm)	ポジション
No. 1	187	319	センター
No. 2	178	312	レフト
No. 5	185	317	センター
No. 7	178	305	セッター
No.11	186	314	レフト
No.12	182	308	ライト

い。特に、No1のレシーブからの切り返しの速さは、世界でもナンバー1である。

レフトのNo2は、身長はあまりないがバランスのとれた小気味のよいスパイクを打つ。また、No11は、以前は荒さもあったが、安定感も増しエースに育っている。ブロックは、両センターが高く非常に良い。守備は、全員が、ボールに対して粘り強くコートに落とさないという迫力がある。また、現在、アジアのナンバー1のチームであり、しかも10歳代を中心とした若手の選手も非常に育っている。

○サーブレシーブからの攻撃

- ローテ1 No1のA,C、No11のレフト平行No12のL。
- ローテ2 No1のA,C、No11のレフト平行。
- ローテ3 No5のC、L、NO11のレフト平行とW。
- ローテ4 NO5のA,C、No2のレフト平行とW。
- ローテ5 NO5のA、No12のL、No2のレフト平行。
- ローテ6 No12のL、No2のレフト平行

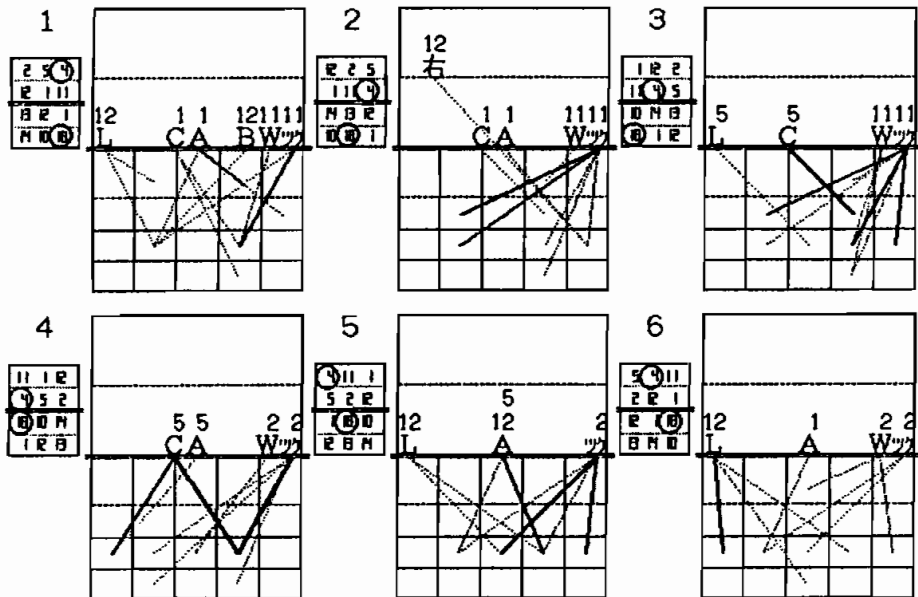


図6 中国の攻撃パターン

Ⅲ. まとめ

本研究は、現在、世界のトップクラス的女子バレーボールチームを対象に、各チームのサーブ・ブレイクからの攻撃の特徴を明らかにしてきた。それらの傾向をまとめると以下のようである。

- 1) 選手の身長が益々進んでおり、また、その選手が移動するなど攻撃面に非常に運動能力が高い傾向が伺えた。
- 2) 各チームのセンター・プレイヤーの速効CW（ライト側の早いトス）を多様化する傾向があった。
- 3) ロシア、ブラジルチームに見られる、男子なみのバックアタックを多様化する攻撃が見られた。
- 4) ブラジルチームに見られる、バックアタックをコンビネーション攻撃にからめた攻撃の傾向があった。
- 5) 中国チームに見られる、セッターの速いトスワークを中心としたコンビネーション攻撃が特徴的であった。

以上、世界のトップクラス的女子バレーボールチームのサーブ・ブレイクからの攻撃の特徴をまとめたが、速効CW攻撃が特徴的であるように、ネットの幅を有効に使った横方向の攻撃が多様されていた傾向があった。また、現在、男子チームが多く取り入れている縦方向の時間差（速効A、B、Cとバックアタックのコンビ）などは、ブラジルチームに多少見られたが、あまり各チームとも攻撃に取り入れられていない傾向があった。

今後、バレーボールのチーム分析に関しては、ブロック体系、レシーブ体系、サーブなど様々な技術分析の必要もあり検討する必要があるだろう。

なお、本校をまとめるにあたり、調査にご協力いただいた九州女子大学の坂井 充先生にお礼を述べる。

注

- 1) 新日鉄バレーボール部総監督が、雑誌月刊バレーボールにおいて世界のバレーボールテクニクというページで各選手のスパイク、ブロック技術を連続写真を用いて解説している。

引用文献

- 島津大宣他 1998 国際女子バレーボール試合の各チーム・ローテーション・フェーズによるゲーム分析 スポーツ方法学 研究11-1 131-140
- 佐賀野健他 1998 男子トップバレーボール選手のコンビネーション攻撃に対するブロックに関する研究 スポーツ方法学11-1 141-147
- 島津大宣他 1997 国際女子バレーボール試合の各チーム・ローテーション・フェーズによるゲーム分析 ス

総合研究所報

スポーツ方法学10-1 99-108

- 金 致偉他 1997 3次元映画撮影法によるバレーボール・スパイクの戦術的研究 スポーツ方法学 109-116
都沢凡夫他 1992 バレーボールのサイドアウトの関する研究 筑波大学運動学研究 81-90
- 豊田 博他 1972 バレーボール技術の評価に関する研究 東京大学教養学部体育学紀要 57-69
- 永田俊勝他 1991 バレーボールの試合における戦力分析 平成2年度日本体育協会スポーツ・医科学研究報告14 66-78
- 福田 隆他 1989 ライバル外国チームのスカウティングに関する研究 昭和63年度日本体育協会スポーツ・医科学研究報告 199-203
- 渡部晴行他 1988 ライバル外国チームのスカウティングに関する研究 昭和62年度日本体育協会スポーツ・医科学研究報告 112-123
- 島津大宣他 1997 国際男子バレーボール試合のチーム・ローテーション・フェズによるゲーム分析 運動とスポーツの科学 9-19